

中世真名軍記の倒置記法について

——『大塔物語』『文正記』を例に——

橋 村 勝 明

一、はじめに

日本人が漢字文を書き記す場合、日本語文の語序に従うということではなく、正格漢文のように動作性の漢字を先に記し、その後に目的格の語を記すということが多々見られる。訓読の際には、これを「返読」と称するが、漢字を書き記す場合には別の用語が必要となり、それを峰岸明氏は「倒置記法」と称されている¹⁾。本稿ではそれに従い、以下倒置記法とする。

矢田勉氏は峰岸明氏の論を受け、近世候文に於ける倒置記法について詳述されている²⁾。本稿は、これらの研究成果を受け、漢字文の一種である真名本について、その倒置記法の様相を伺おうとするものである。倒置記法という観点から真名本検討した場合、漢字文に於ける真名本の位置付けというのは、如何なるものであるのかということを考える、その出発点としてまずは中世真名軍記である『大塔物語』『文正記』を対象とし、その倒置記法のあり方を概

観したい。

『大塔物語』は、応永七（一四〇〇）年、小笠原長秀が信濃守護として信州に下り、一揆によつて京へ逃げ帰るまでを記した軍記物語である。本資料の成立年及び作者は未詳であるものの、嘉永四（一八五二）年成立の模刻本には左の本奥書が存する。

文正元年丙戌応鐘上旬諏方上社栗林五日市庭
閑室而写之文字可多誤候後見懼入候者也堯深法師
七十一歳吉モ悪モ後代之形見也念仏一遍所望也

本文としては他に写本も存するが、何れも近世の写しであり、また奥書の存する伝本としては模刻本が最も古い年代である、文正元（一四六六）年を記している。

『文正記』は応仁の乱頃の社会情勢を記したもので、巻末に

とあり、文正元（一四六六）年成立と考えられる。書写奥書は寛文三（一六六三）年で、成立と書写との間にはかなりの年代差が存する。しかし、真名本の検討対象は資料数が豊富にあるわけではなく、これらの資料も用いらざるを得ないのが現状である。それらの資料の内、成立年代の近いこの二資料を慎重に比較し記述することによって考察の出発点としたい。

一、倒置の用例数の多い漢字について

まずは、『大塔物語』『文正記』^③に於ける倒置記法についてその用例数の多いものから順に記述する。用例には倒置を起こしている部分に傍線を付した。なお、用例は本資料中に見られる一部を掲げるに留め、全用例数を漢数字によつて記した。用例を掲げるに際しては音合符・訓合符を省略し、合字を現行の片仮名字体に改めた。所在は、『大塔物語』の用例を（大一〇一）のように、又『文正記』の用例を（文一〇一）のように、原本の丁行によつて記す。

まずは『大塔物語』の用例を、用例数の多い漢字の順に記す。

〔不〕一〇八例

○然間孰不^ル貴憲法之裁斷^ヲ

（大一〇六）

○惣國人不^レ殘以^二使者^ヲ觸^{ラル}之^ヲ

（大二〇三）

〔可〕六二例

○此儀乍^{ナカラ}云^レ可^ト然始終可^{クハ}取^ヲ弓矢^ヲ者對面頗無益也

（大八〇五）

○綺已違期^{セハ}者後悔不^レ可^ト立^ニ先云々

（大八ウ二）

〔被〕五一例

○長秀被^ニ聞召^ニ候哉敵勢者四千餘騎御方勢者八百餘騎

（大一二〇四）

○龍吟雲起虎嘯^{フケハ}風立^{フツ}長國被^ニ下知^セ

（大一二三〇四）

〔無〕四八例

○肢爪地拘勝馬三長三短悉調無^ニ一缺所^{タル}

（大二三〇五）

○高畠打^ニ履子^ヲ無^レ所凡善光寺者三國一之靈場^{ニシテ}

（大六〇五）

〔為〕三五例

○今日見物者以^ハ頓阿^ヲ爲^キ規模^{ボト}

（大四ウ三）

○室町笠引籠有爲一口覆體上 (大六ウ2)

以下その用例を省略するが、用例数の多い漢字としては、
・「有」三二例・「成」二六例・「非」二二例という漢字が
続く。

同様に『文正記』の用例を、用例数の多い漢字の順に記す。

〔不〕四〇例

○是以天下無不安國家不穩 (文二ウ1)

○如雲如霞充滿不知其員幾千萬 (文三オ1)

〔無〕二三例

○依無爲方難髮易服僞作沙門 (文一ウ5)

○是以天下無不安國家不穩 (文二ウ1)

〔可〕一九例

○雖小臣身最前一騎馳上可謂當千 (文四オ2)

○寔三軍帥可奪匹夫之志不可奪 (文四オ3)

〔有〕一五例

○概神代以來侍凡下區別有之 (文一ウ3)

○聞此雜說雖有上洛之支度 (文三オ3)

〔為〕一四例

○遂從土民爲資身命賣於系圖 (文一ウ4)

○然者敏廣其身雖爲國固 (文四オ6)

用例を省略するが、用例数の多い漢字としては「雖」一
三例・「欲」一〇例・「被」九例という漢字が続く。
以上の漢字が両資料で倒置の漢字として多用されている
漢字であり、「不」「無」「可」をはじめとして、使用度数
の高い漢字が大凡重なっていることが指摘出来る。

三、二資料間で倒置の様相が異なる例について

『大塔物語』と『文正記』とを比較したとき、二資料に
共通して用いられる漢字であっても、その用い方に差があ
る漢字がある。それらについて以下に記す。

先に二資料に於いて比較的用いられる漢字として挙げた
「於」字がそうである。「於」字は、『大塔物語』で三五例、
『文正記』で二七例用いられる。『文正記』では次に記すよ
うに、専ら動作性の漢字に後接して用いられる。

○逍遙之餘斷於鵜鷹鷺和歌兵衛 (文二オ4)

それに対して、『大塔物語』では動作性の漢字を伴わず

直ちに「於」字に目的語を後接する用法が見られる。動작성の漢字に後接する用例は二三例存する。

○且稱「非分押領」且寄「事於守護之諸役」 (大九オ一)

動작성の漢字に「於」字が後接しない用法は一二例存する。

○雖「然於」洛中「者名仁也」 (大四オ二)

これらの違いは、訓点に従えば不読とするか訓読するかという違いであろうが、漢字文を表記する段階での差については、慎重に検討をする必要がある。真名本であるので、本来存した仮名交じりの本文を、漢字に改める際に「於」字を積極的に場所を指示する言語表現と結びつけて用いたものとそうでないものとの違いであると考えられるが、更に検討資料の幅を拡げなければならないであろう。

『大塔物語』では、本来和語のものが漢字表記されることによって倒置を起こすという用例を見いだすことが出来る。見出し括弧内の漢数字は用例数を示す。

「ハカナシ」(四)

○現爾々々無「墓至」于鳥翅「親子恩愛悲者切習」

(大ニ五ウ二)

「ツツガナシ」(二)

○焼「箱録」煖「軍丘」無「恙令」歸洛

(大一九ウ一)

「シドケナシ」(二)

○片飼之駒被「胡檳」皮張鞍「無」四度計「打乗」

(大四ウ一)

「センナシ」(二)

○長國引「替心」云「梟者我等徒」自害而「無」詮

(大ニ八ウ三)

「ヤルセナシ」(二)

○絶「比類」女房餘「無」遺瀨「任」彼時衆爲「戒師」

(大三七ウ七)

これらは何れも「ナシ」となる形容詞で、語意識として二語と認識された結果、「無」字の倒置に引きつけられた書記法であると考えられる。『文正記』では、このような用例について、「無恙」の一例を見出すのみである。

○義敏貞親無「恙」下國

(文一六オ七)

言語量の寡多もあるが、用例数・語数ともに『大塔物語』の方が和語を積極的に倒置による表記を試みているこ

とが伺える。

形容詞の他、次に記すように名詞が倒置記法によつて記されることがある。

○輝^{ホシ}夕日^{セキ}之景^ニ 祧^{ヒコノミ} 亘^{ワタレ} 爲^{ナリ} 躰^{カラダ}

(大一一〇四)

「爲^レ躰」「爲^レ體」は『大塔物語』には七例見いだすことが出来、その結びつきの強さを伺わせる。一方で『文正記』には右の用例を見いだすことが出来ない。

『大塔物語』には『文正記』に見られないような倒置記法が語のレベルで見いだせる。これらは正格漢文には見られない用法であり、『文正記』の方がより正格漢文の倒置を意識していると考えられる。

四、非倒置の用例について

倒置の用例について記してきたが、本来倒置するであろうと考えられる漢字であつても倒置をしない用例も二資料において見られる。

○先^マ一番^ニ鎧^{ヒカウ}韓^{カン}櫃^ク竝^{ナリ}長^{チカ}枝^エ以下^{以下}百^{ヒャク}合^カ計^{ケイ}兒^ニ續^{ツキ}

(大二ウ二)

○鋭^{スル}士卒^{ソク} 蹟^キ者^者共^共方^方々^々走^ニ渡^リ

(文七オ二)

『大塔物語』における非倒置になる用例で、『文正記』と異なる用例が指摘出来る。以下に、『大塔物語』において非倒置となる、擬音語の漢字表記を伴う用例、形容動詞の漢字表記を伴う用例、助詞助動詞の漢字表記を伴う用例の順に記す。

まず擬音語の漢字表記を伴う用例である。

○其^ス勢^セ八百^{ハツ}餘^ヨ騎^キ上^上島^島之^ノ瀨^セ颯^{ハツ} 打^ウ渡^{ワタ}馳^シ 着^キ四^シ宮^{ミヤ}

(大一四〇四)

○敵^ト與^ニ御^ミ方^フ互^ニ見^ミ合^ア時^{トキ}之^ノ聲^セ跋^{ハツ} 舉^{ケル}

(大一四〇五)

但し、『大塔物語』にあつても擬音語を伴うと常に非倒置となる訳ではなく、次の様な場合もある。

○爰^{コゝ}千^チ田^{テン}讀^{ドク}岐^キ守^{シュ}信^{シン}頼^{ライ}者^者一^一番^ニ馬^バ引^{ヒキ}寄^ヨ 乘^{ノリ}飛^{トビ}駄^ダ

(大二三ウ七)

また、『大塔物語』には形容動詞「マッシグラ」が「真^{マコト}深^{シカ}茂^ラ」として用いられ、動詞が続く場合にも非倒置となる。『大塔物語』には三例存するが、全て同様である。

○或^{オキ}置^{オキ}豹^{ヒョウ}虎^コ 皮^{クニ}等^ト張^テ鞍^{カン} 思^{オモ}々^々乘^{ノリ}聯^{レン}眞^{マコト}深^{シカ}茂^ラ打^ウ圍^ヰ

(大五オ七)

○爰ユニ又高梨薩摩守友尊井上須田嶋津以下彼是五百餘騎
眞深茂馳懸マシホマシホ
(大一八オ二)

『大塔物語』では助動詞「ケリ」と助詞「コソ」の漢字表記が存する。助詞「社」に動詞が続く場合も同様に倒置しない。

○甲打ニケリ日鍬形ニケリ武者五六度左右社返ニケリ
(大一一六オ五)
○拳ニケリ天下於手輪ニケリ給ニケリ偏存命故社承ニケリ
(大二三オ七)

動詞が助動詞「梟」を伴う場合、基本的には倒置を起こさない。

○押肌脱腰刀尖オシハタヌキ抜給境節赤澤但馬守御前有梟ユニ
(大一二二オ一)

○知久佐渡守宮田大和守以下甲兵百四五十有梟共ユニ
(大三五オ七)

『大塔物語』には「梟」字が三〇例存するが、その内の一例については右の非倒置ではなく、動詞に「梟」を伴って倒置を起こす用例が存する。

○直綱ナツツナ云重代太刀有梟ユニ五尺三寸ユニ
(大三〇ウ六)

この用例については、倒置のあり方として「梟」字を以て助動詞「ケリ」をあらわすことが中世以降のことであるので、前代には見られない用例であろう。これら助詞・助動詞相当の漢字を伴う用例については、漢文的な漢字の配置というよりも、日本語的な語の配置が意識された結果であろうと考える。

以上、『大塔物語』における擬音語の漢字表記を伴う用例、形容動詞の漢字表記を伴う用例、助詞助動詞の漢字表記を伴う用例について記したが、『文正記』にはこれらの用例が見いだせない。直接的な比較検討が出来ない。しかし、先に語のレベルでの倒置において指摘したように、そもそも擬音語等の漢字表記は正格漢文に従うようなものではなく、そういう意味で『文正記』の方が、より正格漢文の倒置を意識しているものと考えられる。

五、まとめ

以上、概略ながら用例を挙げつつ『大塔物語』と『文正記』との倒置記法の様相を記した。そこから伺えることは、以下の二点である。

①『大塔物語』『文正記』の二資料に於ける倒置記法による漢字種は大凡重なる。

②個々の用例を観察するとその様相に違いを指摘する

①については、漢字仮名交じりによって表記された本文を真名化する際に、基本的な倒置される漢字が共通していることを示す。②については、語のレベルで正格漢文には見られないような倒置記法が『大塔物語』に指摘出来る。これは語のレベルにおいて『大塔物語』が正格漢文を志向していないことを意味するのであろうが、そうであつても①に見られるように基本的な倒置の傾向は『文正記』と一致していることがわかる。いわば、真名化する際の基本となる倒置の方法であると言えるだろう。

注

(2) 矢田勉「候文における倒置記法の簡略化とその原理」(『百合女子大学研究紀要』第三五号)

(4) 倒置の用例数について、

二 一 ※漢数字は訓読の歳の順序を示す
 を一例とし、また

— 16 —

(5) これらの用例数は、所謂置き字として用いられた用例を含む数字である。その内積極的に返読して文を理解しなければならぬような用例は、『大塔物語』では一二例、『文正記』では一例認められるということである。